

公開講演会

「ユダヤ人・キリスト者・ムスリム：
対話と対決における一神教諸宗教」

日 時／2003年10月2日（木） 午後1時15分-2時45分

会 場／同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

講 師／ペーター・シュタインアッカー（ヘッセン-ナッサウ福音主義教会監督）

コメント／中田 考（同志社大学神学研究科教授）

司 会／水谷 誠（同志社大学神学部教授）

講演の概要

宗教改革発祥の地であり、キリスト教国として知られているドイツは、同時に、ユダヤ人やムスリム他、種々の宗教文化を持つ人々の住む多文化社会である。ドイツ、ヘッセン-ナッサウ福音主義教会の指導的地位に居るシュタインアッカー氏が、この国における多文化共生の試みと課題を宗教、社会、文化を視野におさめて説明した。

スケジュール

1:15～1:20 挨拶

1:20～2:00 ペーター・シュタインアッカー
「ユダヤ人・キリスト者・ムスリム：対話と対決における一神教諸宗教」

2:00～2:10 休憩

2:10～2:20 コメント 中田 考

2:20～2:45 質疑応答



「ユダヤ人・キリスト者・ムスリム： 対話と対決における一神教諸宗教」

ヘッセン-ナッサウ福音主義教会監督
ペーター・シュタインアッカー
Peter Steinacker



西欧の多元的社会は、多様な基本的立場、考え、人生観、世界観や宗教が受け入れられる中でその営みがなされています。この営みは、自立した市民が形成する公共社会の中で、その相互関係を解きほぐしつつ、寛容の推進を目指して構築されていかねばなりません。この営みに、相違を発展的に解消し軍事力ではなく公共世界の議論のルールに従い、文化的に、宗教を信じる者とそうでない者が互いに平和的に生きることができるよう力を内に有する諸宗教は参与してきました。

I

2001年の9月11日に私たちが直面したのは、ハイテクと前近代というかけ離れた二つの時代性が同時に現れたこと、すなわち宗教を伴った政治権力とテロリズムの暴力との絡み合いでした。暴力を宗教が身にまとい得るといふ事態は、今日にいたるまで宗教批判の対象であり続けてきました。ニューヨークとワシントンであの恐るべき罪を犯したテロリスト、ビン・ラーディンとそのグループは宗教的な動機から殺人者となりました。彼らは自らを神に捧げた殉教者としてパラダイスにいたる直接の道を勝ち取った、つまりこの場合にはイスラーム的な特徴を持つ普遍的な世界の救いを勝ち取ったという確信の中で行動しました。彼ら自身は、それでもって善なる、愛国主義的な行為、それでもって聖なる行為を成し遂げたと考えました。いかなる批判にも耳を貸さないこの意識の中で彼らは自らと共に人々を死へと引きずり込んだのです。その際に彼らが一貫し

て甘受したこと、それは、自分たちの宗教を受け入れた信仰者をも殺すこと、まさにムスリムにとって深刻な罪を犯すことであります。

この恐るべき出来事に最初に反応して、ブッシュ大統領の口から十字軍という強く重荷となる言葉が出されました。この言葉もまたキリストの十字架を引き合いに出すことで宗教的でありつつ、また暴力性に充ちています。アメリカの大統領はこの言葉を使用したことに弁明を加えましたが、この言葉は世界中に拡がりました。それは中世における戦線構築の反復であるかのように響きました。つまり、カリフ国家の理念に展開されたような、「イスラームを全世界に行き渡らせよ」との神的な託宣に基づいた世界征服の観念を持つイスラーム帝国主義に、キリスト教世界が宗教的な根拠を持つ十字軍の観念でもって応答するというものです。しかしそれは、実際のところでは、地球上の多くの国々で繰り返されるキリスト教徒とムスリムの間での殺し合いであります。

イスラエルとパレスティナでは、途方にくれつつ全世界は終結しようとする暴力の渦の前にあります。疑いもなくここでもあらゆる側面で政治的な目標が、宗教的な根拠づけと救いがたい仕方で結びついています。このことはエルサレムを要求することばかりでなく、とりわけ宗教的な根拠を持つイスラエルの国家哲学とそれから導き出された国境線にも表れています。そして北アイルランドでの、言及だけしておきますと、カトリックとプロテスタントの憎悪にゆがんだ表情にはもはや平和を造り出す人を祝福する主を認めることができません。諸宗教とその社会的、

政治的な影響は世界中のテロ、死、破壊の中心的原因だと思われるのです。

この背景を念頭に置くならば、みなさん方が私に与えたテーマは、単に型通りの祝辞とのいかなる混同も許さない厳しさを持っています。それどころか、一神教諸宗教、いや宗教一般が(ヒンズー教徒や仏教徒は別のタイプの宗教ですが、争い事に充ちたこの世界に在りうべき平和にも関与しています)互いどのような関係にあるのか、それらの対話、それらの対決はどのような様相を見せるのか、この関係や様相を通して、同時に、私たちのこの一つの世界がそこにある諸問題と不正義に対して戦いを挑み包括的に平和を目指すことができるのか、あるいはこの世界が血と暴力の静まることのない犠牲でもって自分自身を混沌の中に貶めていくのか、そのいずれであるのかが決定的に決まってくるのです。

社会の諸状態は人間のもろもろの信念と関係します。この信念は人間を行動へと突き動かすものです。人間は誰でも、行動のために、倫理的な方向づけを持つ信念に依拠します。誰でもその人生を単に形だけの教養とか専門知識でもって形作ることはできません。宗教のすぐれて社会的な機能は、人間が一般に行動にいたることができるために、方向づけを行うこのような信念というものを成立させ、成長させ、成熟させることにあります。方向づけるこの信念が重要であるならば、当然のこととして諸宗教の併存には対決と共に対話の両者が必要だということが明白になります。重要なのは真理です。そしてこの真理要請は、ただひたすら自ら以外に救いの道はないという一神教宗教の普遍的な要求に根差しています。

II

三つの一神教宗教のすべてが内に抱く普遍的な要求によれば、彼らの拠って来る由来である神による救済、彼らに約束された救済は、人間のすべて、宇宙全体を包括的に視野に入れていきます。

これらの宗教すべては、真実の生を所有しており、この真実の生はこの世界、その墮落、艱難に際してそれに帰依する人々に力添えを与えることができると主張します。そしてこれらの宗教は、この世界への、ひとりの神のただ一回かぎりの救いにあふれた介入を根拠にしてこの真実の生を導き出します。その主張によればこの救いにあふれた一回性には絶対的な真理があります。たぶんユダヤ教は例外ですが、これらの宗教がこの独占的な要求を世界中に宣教活動を通してあまねく主張するのは、近代の一つの特徴です。その際に、三つの一神教宗教の間には特徴的な相違があります。

キリスト教は、宣教は洗礼を通して人々をキリストの救いの中につなぎ止めるために、イスラームは知性を通して確信にいたった結果としてアッラーの意志に従属するように動かすために、他の信仰を持った世界と人々に向かって拡張していきます。イスラームは自然的人間の宗教であり、イスラームにとって唯一大切なことは、啓示を覆い隠し、人間の人間たることを覆い隠してしまった他の宗教の暗闇を照らし出すことにあります。「宗教人つまりイスラームでない人間は人間ではない」。いずれにせよ、1976年になってもイスマール・アル・ファールキー(Isma'il al Faruqi)はそのように記したのです。キリスト者になるということは、本質的にイエスにおいて世界に向けられた神の慈しみを今日聖霊において新たにし、存在の根拠ならしめるイスラエルの神、イエス・キリストの父なる神を信頼することです。ムスリムになるということは、アッラーに従うことです。アッラーご自身は必要な洞察をもたらしますが、洞察というものは自由の要素をうちに含んでいるので、「宗教にはむり強いはない」(クルアーン第2章256節)のです。

ユダヤ教では、イスラエルの神が贈与する真実の生命に非ユダヤ教徒が与えることは、拡張ではなく統合だと考えられています。神(アドナイ)がシオンに救いを築いた後に、地上の民はそこに向か



って巡礼の旅を続けます。「彼らは剣を打ち直して鋤とし槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げずもはや戦うことを学ばない」(イザヤ2章2-4節)のです。

この三つの一神教宗教が要求する絶対的真理と独占的な救いの道は、歴史の中で激しく血なまぐさい抗争を引き起こしました。この原因は、一方では潜在的に不寛容な一神論自体の中に、他方では神権政治の意味で宗教が政治権力と絡み合うところにあります。ただひとりの神しか存在し得ないのであれば、救いの道や世界の支配を他の神が要求することはことごとくそのひとりの神に対する抗議となります。「諸宗教の絶対性要求は、それゆえに、自分の宗教には拒みがたいことであり、他のあらゆる宗教に対しては共感して認めることのできないことです」。それゆえに宗教的な救済の約束は、それが組織的に形成されて社会的に倫理・道徳として働く時には、不可避的に力と結びつきます。このことだけでは、しかしまだ当然の道筋としては、宗教あるいは宗教人の宗教的、政治的な権力への参与が暴力へと豹変することはありません。

しかし歴史が私たちに教えるように、その境目は流動的です。新約聖書の報告によれば、キリスト教がなおユダヤ教の分派であった時代には、ユダヤ人や古代諸宗教、後にはローマの国教による血なまぐさい迫害がありました。コンスタンティヌス大帝時代の転回以降には、キリスト教が強制した洗礼執行、十字軍、ユダヤ人迫害の歴史が知られています。それらはいつまでも残る傷跡です。疑いもなくこの経緯に関係するのは、ユダヤ教とキリスト教の基礎テキストである聖書の中に寛容への推進力が欠如していることです。

もっとも旧約聖書には寛容理論が欠如しているにもかかわらず寛容の状況というものが存在します。この状況はバビロニア捕囚におけるイスラエルの実際の寛容経験に連なるものです。紀元前546年のペルシア王キュロスを救済史の思想に秩序づ

け、捕囚者に自由をもたらしそれに伴ってイスラエルを民衆世界に融合させたことで、宗教的不寛容にもかかわらず、それと同時に「国家の寛容」がイスラエルに可能となります。これに反して、アウグストゥス以後のローマ皇帝時代に栄えた宗教文化の中で私たちが新約聖書から見いだすのは、少数派として誠実に憤み深く振る舞い(たとえば1ペテロ3章8-17節)、神に任命されたこの世の支配者である皇帝に敬意を抱くように(ローマ13章)という教示でしかありません。しかし、宗教という事柄には厳しい不寛容があります。礼拝式典についての対話的協調はありません。他の宗教は不信仰なのです。たぶんルカの報告するアレオパゴスでのパウロの演説はいくばくかの例外です。パウロが「神はわたしたち一人一人から遠く離れておられません」(使徒言行録17章27節)と言った時に、彼は古代の諸宗教を念頭に置いていました。

イスラームは少しばかり別様に考えます。イスラームもまたその歴史の中で繰り返し宗教を権力や不寛容に結びつけてきました。とりわけその多様な教派相互の間においてそうです。カリフ国家の宗教的観念、とくに最初の数世紀と近代の刷新運動において信仰を広めるために軍事力を投入したことはそれを示しています。この「聖なる戦争」という形態は「ジハード」という多義的な概念の中の一つの観点を提供しています。この概念は翻訳すれば「神の事柄のための招集」という意味であり、自己の不信仰な性質に抗う戦い、神認識をめぐる戦いとして内面化されて理解することもできます。言うまでもなくイスラームは武器を使って拡がってきたばかりではありません。しかし、最初の数世紀ではイスラームの支配領域の拡大という課題が国家に課せられていました。それはクルアーンに参照箇所を持ち、イスラーム法に明確に定められていました(クルアーン9章5節、29節、4章95節以下など)。

この神の独占的排他性はイスラームのウンマにおける共同体の統一を前提にしています。というのは、

唯一無二の法典の「シャリーア」は宗教的根拠を持つつかいかなる違反をも許さず、神学を直接に世界を秩序づける法だと見なすからです。ウンマは常に政治的共同体と宗教的共同体を一つだと見なしてきました。独占的排他的な救いの経験から必然的に三つの一神教宗教の対決が生じます。なぜなら、それらに共通する基本的前提に従えばただひとりの神しか存在しないからです。キリスト教の三一論もまた同じです。争いは避けられないのです。しかしその争いは必ずしも必然的に不寛容ではありません。それは発展的に解消可能です。

III

こうして決定的な問題を設定することになります。すなわちこの三つの一神教宗教がそもそも対話可能であり多元主義の能力を持っているのかどうか、持っているとしたらどの程度そうであるのかという問題です。事実上、すべての一神教は教派、法学派、伝統という点で内側に多元主義を包み込んで生きています。しかしここでも寛容への道は苦勞の多いプロセスです。アフガニスタンをめぐる争いでは、たとえばシーア派のイランはスンナ派のタリバンよりも、むしろ忌むべき西欧の側に接近しています。もし絶対性を独占的に要求することによって、諸宗教の多様性を突き破ってその背後に横たわる共通性にいたる抜け道が遮られるならば、対話、寛容はどのようにして可能なのでしょうか。確かに具体的な諸宗教の背後に横たわる神性の一致は諸宗教間、すなわち諸民族間の平和を求める対話遂行のためのモデルとして繰り返し通用してきました。三つの一神教宗教を相互関係に置くこのモデルとして、古典的にはレッシングの戯曲『賢人ナータン』に物語られている指環のたとえ話があります。

計り知れない価値を持ち奇跡的な力を持つ指環が何世代にもわたって父親からその最愛の息子へと継承されています。さて、ある父親は三人の息子のいずれが自分にとって最愛の者であるのか決

め難い状況にあります。そこで父親は本物の指環の非常に精確な模造品を二つ作って、息を引き取ります。息子たちそれぞれは遺産として本物の指環を所有していると思い込みます。そしてある裁判官の前に集まります。この裁判官も当然のことながら本物の指環を模造品から区別することができません。しかし、すぐに名案を思いついて、三人の息子の申し立てを退けようとします。本物の指環は「神と人を前にして心地よくする」という奇跡的な力を持っています。それゆえに相続した指環が本物であることを証明するのは生活上の実践であるのです。こうして彼は三人に次のように助言します

さあ! いずれも精出して、
身びいきのない無我の愛を^{こんぐ}求めるがよい、
めいめいが自分の指環に^{ちりぼ}鑲めてある宝石の力を顕
示するように励み合いなさい。
——そして柔和な心ばえ、
和らぎの気持ち、善行、
神への心からなる帰依をもって
その力を助成しなさい。

(『賢人ナータン』(篠田英雄訳)岩波文庫、第三幕第六場の
ナータンの言葉、115頁)

このたとえ話を使ってレッシングが語ろうとするのは、いずれの宗教が真実のものであるのかは宗教哲学的に決定し難いということ。それだけでなくさらに、一神教宗教を識別する伝統やしきたりの背後には愛の根源宗教があります(古い、本物の指環、柔和な心ばえ、和らぎの気持ち、善行、神への心からなる帰依)。つまりレッシングは啓蒙の宗教批判を宗教の脱構築として受け入れ、宗教の本質を絶対的で独占的な啓示要求を伴う理論から人間的な実践へと移行させました。

宗教から道徳が現れ出る。それは誤解ですが、宗教特にキリスト教会の課題はとりわけ道徳に関心



を持つことだという観念の中に今日もおしつこく生きています。レッシングによれば、理性的な愛の宗教は争い合いの中で困難になっている諸宗教了解の地平を人間性の尺度として提供します。この理性的宗教はその時々絶対性要求を解消し、寛容の根拠となります。

レッシングの寛容モデルは、その時代には、諸宗教の相互関係やヨーロッパのキリスト教各教派を顧慮したときに有用であり、また焦眉の課題でした。しかしレッシングのこの寛容モデルは、私たちの多元的で世俗化した——あるいはユルゲン・ハーバマスが最近議論を喚起したように——「ポスト世俗化した」社会ではその任に堪えないものです。それにはいくつかの根拠があります。三つの一神教宗教の核心は愛であるというレッシングの判断は、宗教史的に言えば、適切ではありません。

ユダヤ教の核心は愛ではありません。それは神の民とその世界にトーラーにおいて神が恵みを差し向けることです。キリスト教の核心は愛ではありません。それはただ信仰に基づいて贈られる神の義なのです。そして、イスラームの核心は愛ではありません。それは「法の導き」によってアッラーに身を捧げることです。もちろんこれら三つの宗教のすべてはそれぞれの根源となる核心から敬虔な実践の生活を紡ぎだします。しかしその根源は道徳ではなくそれぞれの神の現臨であり、この現臨から愛が生じます。もっともこの愛の形態もそれぞれでずいぶんと異なるものです。

さて、一層重要なことは、多元的社会を担うことになる寛容概念の決定的な前提、すなわち実際に異なる基本的立場を受容するという前提をレッシングは身につけていないことです。そのような多元的社会をレッシングはまだ知りませんでした。レッシングが試みるのは、宗教相互の他者性をただ歴史的に身にまとった衣装としてのみ理解して、他者性というものを多かれ少なかれ偶然的に生成したものに矮小化し、その背後に真実の一致——つまり諸宗

教の隠れた同一性——の輝きを見ることです。一致形成のための決定的な土台といえる、他者の他者性の受容は認容されず、そこに向かってひたすら努力しなければならない理想的な愛の根源宗教という作業仮説によって代替されます。実践理性は宗教を批判的に分析して人間、神々、諸宗教すべての隠れた同一性を明らかにするのです。

クルアーンの中にも諸宗教が倫理的に競い合うという思想が存在します。第二章には正しい祈りの方向はどちらであるのかということについての議論が見出されます。ムハンマドはまずは天に向かう祈りの態度を指定します。それからメディナへの移住の後には、エルサレムをユダヤ人獲得のための収斂点(vanishing point)だとします。最後にしかしクルアーンの啓示はメッカのカーバに向かう祈りの方向(キブラ)を決定的なものだと断定します。(クルアーン2章144節)。そうするとこの祈りの方向は隠喩的に一つの目標に向かう人間一般の道徳的努力に転用されます。この努力について言えるのは「たがいに競って善行にはげめ。おまえたちがどこにしようと、神はおまえたち全部をひとところに寄せ集めたもう。まことに神は全能であらせられる」(クルアーン2章148節)ということです。

アッラーご自身が導き寄せる諸宗教の一致、善を目指すあらゆる人間の一致を顧慮して対決を平和的な競合にいざなうこの思想は、神学的にはイスラームの寛容思想に転用され、啓典(聖書の)宗教——ユダヤ教とキリスト教——やゾロアスター系の諸宗教に対峙します。この寛容は同権を意味しません。なぜならクルアーンに集められたアッラーの啓示は「アッラーの前にあったものの確証(先にあるものの確証)」(クルアーン2章97節)であると同時にそれを凌駕し廃棄するものでもあるからです。ユダヤ人とキリスト教徒は時間の移ろいの中で彼らの聖典を歪曲したので、アッラーは新たに着手する必要がありました。ムハンマドの派遣と彼に対するクルアーンの啓示は、この宗教の歴史

の頂点であり凌駕するもののない完成です。そしてイスラームに反対しない限り、名を挙げられた啓典(聖書の)宗教——ユダヤ教とキリスト教——は、そこにもアッラーが働いているので明らかに保護されるべきものとなります。

アラブ・エジプト共和国の宗教大臣であるマフムード・ザクズーク(Mahmoud Zakzouk)はこのクルアーンに基づいて二重の寛容概念を発展させました。この二重概念で彼が示そうとするのは、イスラーム宗教は理論において——たとえ必ずしも実践ではないにしても——近代的、つまり多元的な国家の基礎を据えることができるということです。ザクズークは普遍的に付与された人間的理性的才能に基づいてあらゆる人間が義務として負うべき寛容と、その才能の特別の場合である宗教的寛容を区別します。ザクズークに従えば、私たちは絶対的に正しく、「完全な真理を所有している」と請け合うことはできないから、この普遍的な理性的能力は寛容へ強く導きます。そして、アッラーはすべての人間に正しく振る舞うことを要求しますが、このような振る舞いはたとえ制限付きのものであるにしても、理性の洞察能力を必要とします。それゆえに正しく振る舞うという企ては普遍的な寛容の尺度となります。「他者に対する寛容は正義に他ならない」のです。この宗教的な戒めである寛容に、「イスラームの教えに従えば原理的に神にいたる適切な道である啓示宗教のすべては」該当します。そして当然のことながら預言者ムハンマドは初めから宗教的寛容と信仰の自由——つまり宗教多元主義——という事態を主張したのです。

預言者がメディナで建てた神権国家はアラブ人とベドウィンの部族宗教に対しては全く寛容ではなかったこと、ユダヤ人とキリスト教徒を同権の市民としてではなくただ制限された市民権と制限された宗教の自由を持つ「保護されるべき者」(ジンミー)だと次第に強く見なしてきたこと、今日までイスラーム諸国に通用しているこのことや啓典(聖書の)宗教

以外のものはたいてい容認されないこと、そういったことを度外視すれば、イスラームの寛容思想もまた他者である異国人の他者性のままでの受容ではなく、神性と関係した平等観念に基づきます。なぜなら啓典(聖書の)宗教においてもクルアーンに最終的に自己を啓示したアッラーは啓示しています。それらの宗教の内に働く神は決して未知の神ではなく、ひとりの唯一にしてすべてに慈しみを向ける存在であり、その目指すところは「多数の一致」としてこの世界と共にあります。

それゆえに、レッシングの場合と同じようにクルアーンにおいても、またクルアーンに基づく近代のイスラーム神学においても、私たちは一つの寛容概念を見出します。それは「相違の発展的解消」という社会的課題をあらゆる違いを包み込む神学的、宗教的平等によって達成しようとしています。つまり、すべての啓典(聖書の)宗教は、たとえそれが簡略化され歪められた形態であっても、要するに「イスラーム」なのです。しかしこのような仕方では、あらゆる宗教に宗教として認められるべき、宗教に属する絶対性要求と多元的社会に必要な寛容を互いに調和させることはできません。この理論に基づいては、生きるために必要な洗練された仕方での対話と対決の同時進行、共生と相違の同時進行、開放と統一の同時進行はありません。このような平等に基づく寛容の観念は諸宗教の間に平和を達成することはおろか維持することもできません。社会の世俗化が進展する一方で、他方ではその社会の中で諸宗教は引き続き存続していきます。このような仕方では、国家神学に頹落することなく、憲法にかなった国家と宗教の分離を跳び越えようとすることなく、社会的な「常識(Common sense)」の形成に向かって共に働くという諸宗教の社会的役割をはっきりさせることはできません。

IV

このことに成功できるのは、唯一「原理的に多元



主義」ないしは「多元主義を立場として取ること」(positioneller Pluralismus)を遂行できる諸宗教以外にありません。これらの諸宗教のみが、不安定な多元的世界観に対する二つの災いに充ちた不安に発する反応を回避することができるのです。この反応は諸宗教すべてに存在する「何をしてもかまわない」という相対主義や原理主義によって思い知らされているところです。

この両者はすぐれて近代の現象です。一方では、すべては同じ価値を持ちすべてはどちらでもかまわず基本的に大した問題ではありません。他方では、焦点となる唯一の真理のみ、つまり異なる真理確信のすべて、世界の無限の多様性というものを強制的に閉め出して得られる産物のみが大切です。相対主義が、個別の局面が集まってできた荒れ果てた廃棄物の中でそれぞれの「ふるさと」を見失っているとすれば、原理主義は分派的なサブカルチャーという要塞の中に自己自身を閉じ込め、自己自身の外側にあるものすべてを誤謬に捉えられた蒙昧であり悪の国だと弾劾します。この相対主義や原理主義はすべての宗教、すべての文化にまわりついています。

このような「多元主義の立場を取る」という姿勢は三つの本質的特徴を持っています。

1.

この多元主義は、自己の宗教の独占的な真理要求を確信しています。そしてそこから他のすべての宗教を評価するための展望を得ています。その神において唯一専一の救いが現在しています。ユダヤ教的であるとは、「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である」(申命記6章4節)ということ。キリスト教的であるとは、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」(ヨハネ14章6節)ということ。すなわち宗教改革的信仰の頂点、「ただキリストのみ」ということです。そしてイスラーム的とは、「イスラーム以外の宗教を求め

る者は、何一つ受けいれていただけない。そのような者は来世で損をするだけ(クルアーン3章85節)ということなのです。

これらすべての宗教に認められる独占的な真理要求は、しかし同時に、それがなければ相互宗教間対話を不可能にし無益にする真理展望をももたらします。「その時々対話のパートナーが自ら自身の立場を互いに自分で定義し合える時に」初めて対話が可能になります。このこと的前提として踏まえておくべきは、絶対的な真理要求は神の自己開示に関してのみ妥当し、私たち人間の宗教的な諸制度、たとえば教会や道徳やしきたりのようなものに関係しないことです。そして諸宗教はこの比較を絶する相違について、異なる神とそれに帰依する者の他者性について、そのままであり続けてよいと互いに認め合わねばなりません。

この真の対話の目標が、暴力を使わないで争いを解決することであり相互理解を常に拡大していくことであるにしても、相互の完全な理解の限界となる枠はそれぞれの神の神たる有り様にあります。アッラーを「理解する」とは他者にとってはアッラーを信仰するという以外にありません。キリストを「理解する」とは他者にとって十字架と復活のメシアたるキリストを信仰するという以外にありません。イスラエルを選びイスラエルにシナイでトラーを与えた神を「理解する」とは、この神を信仰すること以外にありません。「イスラエルの信仰の歴史には、ただイスラエルの視点でのみ認識可能な何かがあります」とかつてマルティン・ブーバーは記しました。

2.

立場としての多元主義の前提は、それゆえに他者を他者のままに受容するという寛容です。寛容とは、イスラームの寛容思想が少なくとも認容するように別の基本的姿勢(立場)を甘受することではなく、原理的に同一の立場に立つことです。この立

場は、宗教と国家を分離するけれども共同作業を締め出さない公的団体の中でのみ達成可能です。この土台に基づいて幼稚園から墓場までの共同作業に多様な可能性が生じるのです。

奇妙なことに、この原理的な同権性は、誰でもが認める「拒絶の要素」から生じています。寛容とは、すべてが無意味に無差別に同じということではありません。寛容は他者としての他者を受容する中に必然的にこの拒絶の要素を含んでいます。もしそうでなければ、他者の基本的立場は一方にとってはどうでもよいものとなり、彼は彼自身の原理に矛盾をきたすことになるのです。寛容におけるこの拒絶の要素が現実の対話と対決を進め、社会関係を動かし形成するために、対話のパートナー、論敵、競合相手に対し宗教的な相違にもかかわらず非宗教的次元での原理的平等を認めねばなりません。それこそが生活設計と人生の目標における対立と矛盾を知性的に許容するものなのです。

世俗化した西欧社会では、相違を許容し、また相違を同時に洗練されたものにしていくこの平等は、すべての人間の法の前の平等、基本法(憲法)に根差した人権の平等として表現され、どのような神にも依存しません。ユダヤ人、キリスト教徒、ムスリム、火の神を崇拜する人々(ゾロアスター教徒)、無神論者は多元主義においてすべて同じ権利と尊厳を有する公民なのです。この多元的社会に無条件に必要な他者の自律性、資格認知の多様性、象徴的世界、哲学、学問の多様性といったものの前提であり結果でもあるのがこの平等なのです。「多元的社会では行為の根拠づけにいかなるコンセンサスも要求されてはならない。おそらくしかし、共通の目標についての実践的コンセンサスは実際の協力作業のために可能でなければなりません」。

すなわち、自己と教会や宗教組織など自己の所属する共同体との間、社会とその規範との間を分離せずに意味ある仕方で区別することのできるたぐいの宗教のみが多元主義を遂行することができま

す。キリスト教世界はこのことを血なまぐさい教派戦争と啓蒙の経験を通じて苦勞しつつ学ばなければなりませんでした。寛容はキリスト教世界がその基礎となるテキストに基づいて単純に手にしうる原理ではありません。西欧世界における人権はヨーロッパ文化の根本的規範的な危機への回答であり、本質的に教会に対する戦いでありました。しかし諸教会や西欧のユダヤ教諸組織はこの社会的な進展に応答し多元主義国家の二つの重要な原理、つまり国家と教会の原理的な分離と消極的、積極的両面での宗教の自由を支持することになりました。これに関連して、福音主義(プロテスタント・キリスト教)の神学者として私はみなさん方に、プロテスタント宗教改革はこの方向において比肩するもののない成果を挙げたことを指摘いたします。

この二つの原理についておおかたのイスラームの諸国家は大きな問題を抱えています。なぜなら、これらの原理を土台にしたならば、多元主義国家における人権概念とその射程内に置かれるのは、「世俗的規範的スタンダード」、すなわち宗教的根拠づけからの独立であるからです。この特色は、私の見るところでは、イスラエル国家において過激な宗教的公民と世俗的公民との間での激しい文化闘争を形成しています。今日も尊敬を受けているユダヤの宗教哲学者シャローム・ベン・コーリンはこれを「逆説的な」状況と名付けて、「イスラエルは国家としては、非宗教的な国民が大半を占め、西欧の民主主義の体制にあるが、場合によっては神権政治的な立法措置をも伴う」と述べました。人権をあらゆる宗教から独立させることは、同時に、「イスラームにおける人権の声明」と調和させることを困難にしています。この声明は1990年にカイロのイスラーム会議で取り決められました。このカイロ声明の第24条によれば人権は「シャリーア」に従属します。

相互宗教間対話と互いに相違する宗教相互の対決は、ここでは、当該社会全体の対立を含み込むものになっています。なぜならムスリムのドイツ国



民が繰り返し直面する問いは、彼らは基本法(憲法)を原理的に尊重するのだろうか、ドイツの宗教的多数派を形成する時にもそれを尊重するのだろうか、あるいはクレーンと伝承の中で命じられているように、少数派として単に暫定的、実際的に多数派に順応しようとするのだろうかです。

キリスト教世界はこの社会的対決の中で、イスラームの内なる改革の力を促し助成することができます。それは、いわゆる「ヨーロッパの精神生活」への実りをもたらさない順応を新植民地主義的にイスラームに強いるものではありません。イスラームの信仰を持つドイツ人は、彼らがまさに彼らの独自性を維持しつつ全体の一部となる時に、私たちの国を変えることになるでしょう。もちろんドイツのイスラームもその故国の諸伝統と照らし合わせつつ自己を変えて行くでしょうし、また変えていかねばなりません。民族的、国民的なアイデンティティーの再活性化は経済と政治のグローバル化のおかげです。移住者はこのようなアイデンティティーによって変えられて行きます。そして同時に移住することでこの地のアイデンティティーを変えて行くのです。

しかし何と言っても多元的社会は無防備なこの社会に敵対する者たちの悪行をやめさせねばなりません。その際に彼らがどの宗教に属しているのかは問題ではありません。この無防備な社会の存在の基礎が自覚的、意図的に破壊される時に、他者の受容とは何もしないで傍観することではありません。無防備な社会の原理は、まさに宗教の自由な選択であり、宣教の自由、信仰を変える自由、消極的な宗教の自由、結婚や遺産相続という点も含めた男性と女性の同権、肉体的、精神的損害を受けない権利であり、宗教的にではなく国家的に整備された戸籍法等々なのです。

3.

三つの一神教宗教は互いに共同して、押し寄せるテクノロジーの発展やそれに伴う社会現象に、世

俗化が進展する中に生じていく事柄を呈示して預言者的に奉仕することができます。社会の持つ意味を規定する場合、諸宗教が形成してきたことを忘却したり無視したりするならば社会から失われてしまうものに注意を促したのは、再び、ユルゲン・ハーバマスでした。「かつて考えられたことを単に除去するだけの世俗言語は困惑を後に残す。(宗教的)罪が(法的)罪に、神のいましめに対する違反が人間的ルール違反へと変容するならば、何かが失われてしまう。なぜなら、(宗教的な)赦しを請うことには常になお他者に加えられた痛みを元に戻そうとする静かな願いが伴っている。犯した痛みが元に戻らないこと、無垢の虐げられた者、辱められた者、殺害された者へのあの不正は私たちをいよいよ悩ませる。よみがえりへの希望が失われると、身にしみる虚しさが後に残る」のです。

このことは単に胚の幹細胞(embryonic stem cells)や人間の自由な振る舞いが帰結するところについての研究に当てはまるだけではありません。人間を創造した存在を想定すること、そしてその存在と被造物である人間の間の絶対的な違いを平準化しないこと、その場合にのみこの自由は維持できます。しかしまたとりわけこのことは経済のグローバル化がもたらす政治的影響や政治行動一般の動機にも当てはまります。西欧世界に生きる私たちは、多元的で多様な基本的立場と絡み合った経済的優位を後ろ楯にして「世界中を世俗化する権力」(ハーバマス)となっています。しかし「啓蒙の弁証法」やそれが後に残す荒野もまた知っているのです。

犯罪的なテロリズムとの現在の世界規模の闘いを見た時に三つの一神教宗教は次のことに注意を促します。すなわち、回心、悔悟、悔い改めという生き方を修正する態度は、生を方向づける唯一の尺度として自己の良心を絶対視する啓蒙的な人間の態度をはるかに超え行く人間的振る舞いの様式だということです。回心、悔悟、悔い改め

という営みは個人にとどまらず社会、その中の諸グループにとって生命の領域へ回帰すること、死を意味する神の僻遠^{へきえん}から生命である神の目睫^{もくじょう}への回帰であるのです。

これは宗教的と自認するテロリストにも、私たちにも該当することです。テロリズムと対決することは、私たちは何を間違ったのかと西欧世界が自問することでもあります。さもなければユルゲン・ハーバマスが正しく見たように、「西欧世界はただ十字軍の戦士あるいは貿易大国としてしかアラブ世界には見えません」、つまり非文化的な野蛮人としてしか西欧世界は見えないのです。そうこうするうちに軍事的に疑問視されることになったラマダーンでのアフガニスタン爆撃は、ムスリム自身がラマダーンを必ずしも平和の時だと考えていないにしても、それを中断して、ターリバーン以降の政治的展望の兆しとすべきです。当然、この促しは別の人々、とりわけその政治によって何百万人もの人々が難民になってしまいうイスラーム諸国のエリートたちにも向けられています。まさにエリートたちは西欧の誘惑と名付けるところのもの、彼らがよく自覚しているところのものによって腐敗することもあるのです。

三つの宗教が社会に勧める悔い改めの営みは、和解というものが了解ということ以上のものであるという自覚に基づきます。なぜなら和解には「この世界の体制についての観念」が結びついており、「ここでは今在る苦難が廃棄されているばかりでなく、不可逆的なはずの過ぎ去ったことも撤回されている」からです。このようにして、必要な対話と諸宗教の洗練された競い合いという意味でその対話に結びついた対決は、ユダヤ人にもキリスト教徒にも共通する聖書に書き記された世界、「正義と平和は口づけ」するという世界の救世主的な光に照らし出されます。

この諸宗教の見通しから、現在の強力な安全性願望も脱神話化することができます。人間は平和に生きるために内的、外的な安全を必要とします。こ

れは三つの宗教すべてにとってしごく当然のことです。それに配慮することは国家の第一の課題です。国家がこの課題を履行するならば感謝すべきことです。テロリスト、とりわけ犯罪を宗教でつくろう人々に悪行を止めさせるために、国家は憲法に従って可能なことをなさねばなりません。

しかし、諸宗教はこの安全性願望を援助して抽象的な幻影を与えないように援助することができます。諸宗教は、その伝統の智慧に基づいて、生の底知れぬ不確実性を完全な確実性へ転換しようとしても人間性一般を損なってしまうだけであることを示します。このような絶対的な安全性は偶像崇拜以外の何ものでもありません。トルコ人が1529年にウィーンに達した時、ルターは皇帝に勧告して臣下を守るように勧めました。しかし同時に「皇帝の剣は、信仰について何も造り出すことはない。それはこの世的な肉の事柄である」と強く主張しました。そして同年に宗教改革の賛美歌を作詩したのです。「神は我が砦、我が強き楯、武具である」(讚美歌21、377番)。この賛美歌は詩編46に依りつつ神は今ここにおられ私たちを守られていると賛美します。「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてください。わたしたちは決して恐れない 地が姿を変え 山々が揺らいで海の中に移るとも」。包括的な意味で人間を守る「安全」というものを三つの一神教宗教すべての神々は保持しているのです。

奈落から守られているというこのような確かさは、地上世界での安全を損なわず、それが必要だと示すものであり、預言者ムハンマドの夕べの祈りにも記されています。

神さま、あなたを通して私たちは夜を体験します。

あなたを通して私たちは朝を体験します。

あなたを通して生き、

あなたを通して私たちは死にます。

そしてあなたへと私たちはよみがえるのです。